

尼波羅國の佛教

佛國文學博士 シルヴン、レヴィー氏講演

松井知時 通譯

本題に入るに先だつて、レヴィー氏の略歴を述べて置きます。

シルヴン、レヴィー氏(Silvan Lévi)は千八百六十三年(我が文久三年)三月二十八日、佛都巴里市に御生れになり

まして、千八百八十二年(明治十五年) リサンシエヌレツトル 文學士となり、其の翌年高等教育の適格者たる資格を受け、千八

百九十年(明治二十三年) ドクトワールエヌレツトル 文學博士の學位を得られました。又、氏は吠陀研究の大革新者たるアベル、ベル

ゲーニユ氏(Abel Bergaigne)に師事せられた方であります。

氏の梵語教授としての略歴を申しますと、千八百八十六年(明治十九年)に高等學院(Ecole des Hautes-Études)に、千八百八十九年(明治二十二年)に巴里大學の文科大學に、千八百九十四年(明治二十七年)に「コレージ、ド、フランス」(大學系統以外に立つた)に御入りなさいまして、梵語の講座を御持ちなさいましたが、千九百十九年(大正八年)には更に獨逸國「ストラスブルグ」大學に於ける東洋學研究の組織を指導を囑託されて其の衝に當つておいでし御座います。

尚ほ此の外、本文の初めに御座います通り、千八百九十七年より九十八年に亙つて一度(即ち明治三十年より

三十一年)に、千九百二十一年より二十三年(大正十年より十三年)に亙つて一度ご都合二度印度及び日本へ學事宣傳の任務の爲め特派されなさいました。それから大戰中、外務省より「バレストアイン」や北米合衆國へ派遣されなさいましたり、千九百十九年の平和會議にも御關係なさいましたなご、述べればいろいろ御座いますが、細かいことは略して置きます。(通譯者)

尼波羅國は、印度の國々の中で、佛教が未だ亡びずに残つて居る最後の國であります。此の國を除いては、印度の何處に行つても、佛教は全然跡を絶つて居ります。私は此の尼波羅國に二度入りました。即ち一千八百九十八年(明治三十一年)に一度と、昨年(一千九百二十二年)とでムいますが其の間二十五年を距てゝ居りますから、此の間に、同國の佛教が奈何に衰頽していつたかを看取することが出来ました次第でムいます。若し尼波羅國以外の佛教徒が、努力して同國の佛教に再び新らしい生命と活氣とを注ぎ込むことを致しませんならば、其の佛教も亦やがて亡びて了ふ運命を持つて居ることは明かであります。

かゝる次第でありますから、本日私が此の問題に就て皆様に御話申し上げますことは、時節柄緊切の事であると信じて居ります次第でムいます。

**

**

**

**

皆様も御存知の通り、尼波羅國は、印度の北部に存在する一獨立國であります。雪山即ち「ヒマ

「ラヤ」山の南の傾斜地に國を建て、居りまして、同山脈の走つて居る方向と同じ方向に延亙して居ります。細くて長い地域の國であります。長さは八百「キロメートル」、即ち日本里數で申しますれば二百里で、廣さは一百六十「キロメートル」即ち四十里で亙ります。

譯者又皆様の御宥

しを請うて、同國

の地理に關するこ

とを今少し述べて

置きませう。其の

方が幾分か興味が

深からうと思ひま

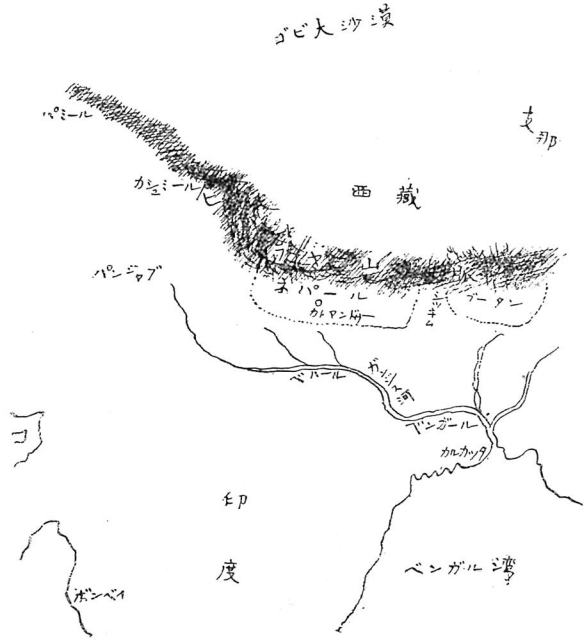
すから。

尼波羅國は梵語で

は「ネパール」と申

しますが、佛蘭西

斜面に位置するところの高地と、首府「カトマンドゥー」の所在溪谷なる中位地と、深い谷よ



語(英語)ではネ

ポール (Nepaul)

又は「ネパール」

(Nipal)に申します。

上に掲げた地圖で

大體の位置は御わ

かりでせうが、同

國を地勢上から三

部に分けるさうで

あります。即ち「ヒ

マラヤ」山の南傾

り成るところの沮洳勝ちな低地とであります。都市としては首府の外に「パタン」、「グルルカー」
 其他がムいます。主要な河流は四つ斗りムいますが、皆「ガンジス」河即ち恒河に注ぎます。地
 下には礦物が豊富で、森林には、猛獸や、猿類や、蛇類など中々多く、水牛も居れば、象なご
 も群をなして居るといふことであります。又家禽も多いと申します。農産物としては穀類も野
 菜類も相等に澤山ありますが、農業はまだく幼稚ださうです。

第十八世紀に「グルルカー」族が一時領土を擴めましたけれど、其の後、支那人や英國人の侵入の
 爲めに又今日の大きさに狭められて了ひました。

國王の名稱を「マハーラジャー」と呼んで居りますが、王と申しましても唯名斗りで、實力は餘
 りないと申すことでムいます。

偕、此の國に存在して屋りますところの歴史上の紀念中最も古いものは、西曆紀元前三世紀（日
 本では、梵字が始めて本邦に渡來したと唱へられて居る孝靈天皇の御世に相當して居ります）に印
 度に君臨せられました阿育王（^{アシヨカ}Ayoka）の時代に出來たものだといはれて居ります。阿育王は、晩年
 王位を御去りになり、出家せられました。佛蹟巡拜に御出掛けなさいました時に、此の尼波羅國の
 濫地にも御滞在あらせられ、此の地に五つの支提（^{カイトラス}Caityas）即ち塔を御建てになりましたといふ傳説
 がムいまして、其の五つの中の一塔は、今の「パタン」（Patana）と申す都の中央に建て、殘る四塔を

其の都の東西南北に御建なさいましたといふことであります。阿育王が、斯く都の四方に塔を御建てなさいました趣意は、傳説に據ると、之によつて世界の四期、即ち瑜伽 (Yugas) の最初の時日を記念なさいます爲めであつたと申すことであります。

此の傳説は、何等正確なる歴史上の根柢を有つて居るものとも覺えられませぬが、少くとも、此等の紀念物を呼ぶに當つて用ひられた語(即ち「チャイテイヤ」といふ呼び方)の妥當なることを示して居ります。いひ換へれば、阿育王の御建てなさいました五基の塔を、スツピヤ 窣堵波と呼ばないで、支提即ち「チャイテイヤ」と呼んで居ることが妥當だといふのであります。何となれば、スツピヤ 窣堵波 (Stūpas) といふには、佛骨、佛舍利等、佛の遺物を納めてあるものでなくてはならないが、單に支提といふときは、嚴正な意義では、唯、敬虔なる信心を誘起するために建てられた營造物といふに外なりませぬからであります。それ故、阿育王の御建てなさいましたといふ塔は、スツピヤ 窣堵波ではなく、支提即ち「チャイテイヤ」といふのが至當なわけであります。

ところで、彼の都の四方に建てられて居ります支提は、唯今でも現存して居りまして、大體から申上げれば昔其儘で、其全體の外観は、古來の傳説と矛盾して居ると見るべき點は少しもありません。今其の構造をざつと申上げますと、半球形の巨大な土の堆積を、煉瓦で覆ひ包みまして、其の周圍を同じく煉瓦で取り圍んで(側石即ち「ソハイシ プリント」(腰張のやうなものであります)としてあります)。

そして、其の全體が圓形で歩道（經行する）の臺の上に載つて居ります。

それから、此の半

球形の帽子形のもの

、東西南北には、互

に背を向けて一々龕

（ホコラ様のもの）が

嵌め込まれました、

其の龕には方角に應

じて各々佛像が祀ら

れてゐいます。即ち

東方には阿閼佛、西

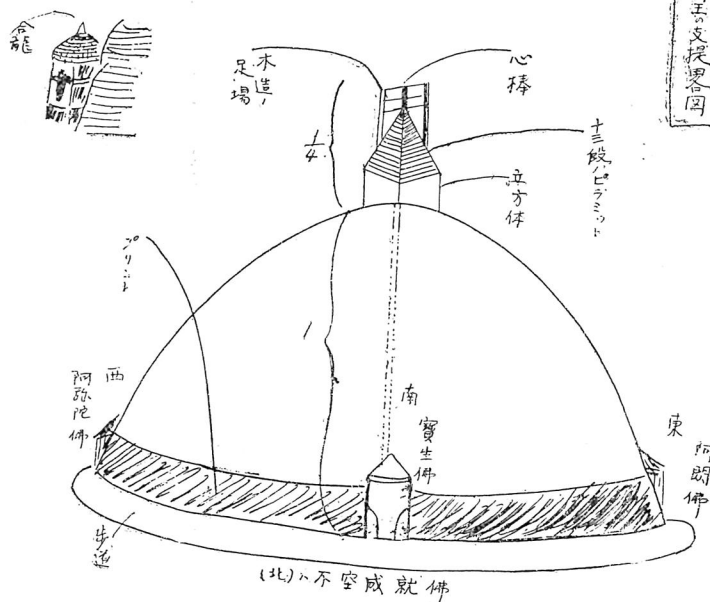
方には阿彌陀佛、南

方には寶生佛、北方

には不空成就佛が祀

致しまして、蓆製の或る装置を此の足場で支へまして、雨期の際、頂上から水の滲入することを防

阿育王の支提婆圖



られてゐいます。

又其の半球形のもの

、上に、低い、漆喰で

固めた立方體がありま

して、其の又上に、煉

瓦で積み上げた牢りし

た方尖塔が載つて居り

ます。此の「ピラミッ

ド」は十三段になつて

居りまして、其の頂上

に、石で造つた棒が立

つて居りまして、其の

棒に木造の足場を固定

ぐやうになつて居ります。雨期が過ぎまして乾燥期に入りますと、蓆の装置を取り去り、木骨に布を張つた傘蓋を以て之に代へるのであります。

この、阿育王の御建てなさいましたといふ塔は、印度佛教の遺蹟中で、最も舊い時代の建築の様式を保存したものであります。

これに比較致しますと、尼波羅佛教に於て最も神聖視されて居ります「スヴァムブフ、ナートハ」(Svayambhū-Natha)〔俗に「シャムブ、ナートフ」(Syambu-Nath)と呼ばれて居ります〕といふ神様を祀つてある支提は、建築の比例の上に重大な變化の施されたことを示して居るのであります。

前に述べました古建築の主要部を爲して居ります半球形は、此の支提に於ては、底部に於て其の大きさを減じ、高さに於て其の長さを増し、其の頂上はおしつぷしたやうになつて居ります。

前の側石そばいし即ち「プリント」の部分は、前方に突き出て、二尺斗りの幅の環状「テーブル」となつて、ぐるりと半球形の部分を取巻き、石の平片で造られ、又石の小さい圓柱の上に乗つかることゝなりました。

又古代建築では、半球形の丘土の上に、十三段の「ピラミッド」がありまして、其の高さは、丘土の部分の四分の一に過ぎませんでした。今度は、其の「ピラミッド」は、上にある足場などを除いて、丘土の高さと同一になつて了ひました。

斯様に建築の様式が發展して參りますと、建築術上重大な意義を有することゝなりまして、小塔の底部には、前方に突出して蛇腹を有することゝなり、鍍金の銅の薄板で飾られ、喇嘛敎の寺塔に於て見るやうに、四面に、各々くはつと、開いた兩眼を有することゝなりました。そして其の兩眼は赤、白、黒の三色で塗つてあります。これは、「アーディ、ブッドハ」(Adi-Buddha)、即ち原始佛の標識であります。塔の十三段は、十三段の傘蓋と變りまして、一々離れて居ります。それは、各銅板で包んだ木製の十三個の圓盤で、其の外側の部分は、鍍金してムいます。そして其の圓盤は、中心の柱を圍んで、一定の距離を存して、屢々相重なつて居ります。

圓盤の一番上にあるものゝ上には、鍍金した木枠が載せてあつて、又其の木枠の上には、巧に彫刻を施した金屬製の輪が載せてありまして、此の輪の上に、三脚架を据へまして、それに、鍍金の銅で造つた小さい鐘樓と鐘とを持たせてあります。

此の「スワヤムブフー、ナートハ」の支提は、チャイタイヤ靈驗の顯著なること全國に其の比を見ないほどである爲め、其の爲め却て屢々修繕の必要に迫られました。

西藏人は、宗敎に熱心であつた結果、久しい昔から此の「スワヤムブフー、ナートハ」の靈塔を自分等の手で引受けて維持して居たものと見えまして、已に、一千六百三十九年(日本の寛永十六年、即ち三代將軍家光の時代で、寛永錢が鑄造せられたり、島原の亂があつたりした頃)、西藏の

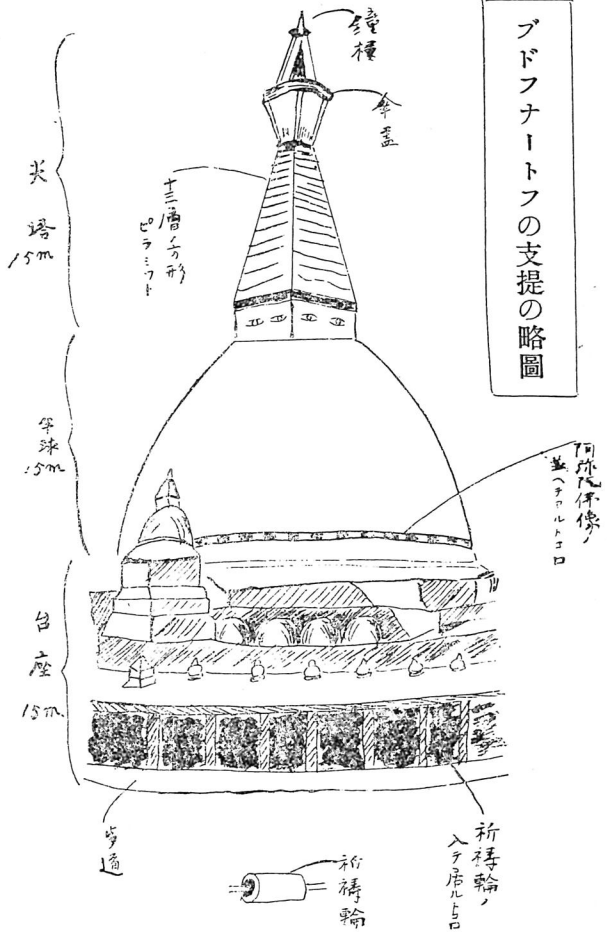
ラサ
拉薩 (Lhasa) から一人の喇嘛ラマが参りまして、鍍金の銅の薄板で、塔の上部にありました鐘樓も、其の基礎の部分も張り詰め、一番頂上へもつて行つて、鍍金の傘蓋を建てました。又、一千七百五十年 (日本では寶曆元年、桃園天皇の御世、支那では清の世宗の乾隆十六年に相當し、康熙字典の選成りて後三十六年目であります) に、同じく西藏の喇嘛僧で「カルマバ」(Karnapa) と申す者が、國王と、百官と、人民との利益の爲めに、北方から参りまして、吉日を選んで、「カリユガ」(Kali-yuga) (即ち鬪争の時代の罪惡が破壊して、人の住むに堪えぬやうにした此の堂宇を修繕したといふこと) が、現に此の塔宇の「ブラット、フォーム」に存在する梵藏兩語で刻して碑文に明かに書いてムいませす。此の碑文によりますと、其の喇嘛僧は、智慧は日月のやうに光る人であつと申すことでムいます。尙ほ此の長い碑文には、其の修繕に關する巨細の記事がムいますが、それに據りますと、此の修繕は、「マハーデーワ」(Mahadeva) 即ち濕婆神、「ガナパティ」(Ganapati) 即ち歡喜天、「クマーラ」(Kumāra) 即ち俱摩羅天、「ヴィシヌマー」(Vishnu) 即ち韋紐奴天、等の神々と、尼波羅國諸王 (Rajas) との冥護顯助の下に成し遂げられたことがわかります。即ち、「カートマンドゥワー」(今の尼波羅國の首府) の王は、御自身の内帑を開いて此の堂宇の修繕をなされました。又、「グルカ」(Gourka) 族の王で、後には尼波羅全國を征服しました「プトヒギー、ナーラーヤナ」(Pithivī) (Nārāyana) 王は、一番巨大な柱となるべき角材を、塔宇の下まで人に牽かせることを約束致しましたが此の修

繕工事は、内亂の爲めに中止されまして、西曆一千七百五十八年（即ち寶曆八年）に至つて漸く其の完成を見るに至つたのであります。此の時には一番底から起つて、塔の頂上まで通つて居る中央の軸柱を取替へねばならなかつたのであります。此等の修繕に要した費用は、實に莫大なものでございました。即ち、黄金三十「キログラム」（日本重量八貫目）、之を今日の日貨に換善して五萬圓の實價あるものと、銅無慮三千五百「キログラム」即ち九百三十三貫目強とを要したとこのことでありますし、尙ほ一週間毎に祭祀に用ひた麝香の價は、印度の貨幣で一千「ルービー」（邦貨六百五十圓）と申します。一週間の生活費が、平均一「ルービー」で足りるといふ尼波羅人に取つて、前記の費用が奈何に莫大であつたかと申すことは、新に説明するまでもないことであります。

一千八百十六年（日本の文化十三年で、孝明天皇御即位の前年）に、此の堂宇の上部は、大暴風の爲め全部吹き下されまして、其の五十八年前、即ち一千七百五十六年（寶曆六年）に苦心して建てた中央の軸柱を折つて了つたのであります。此の時は、尼波羅の佛教の盛時は已に過ぎ去つて居ましたので、修繕は中々出來ず、其の費用を募る爲めに、一千八百二十五年（文政八年）まで、九年間を待たなければなりませんでした。

「ブドフナートフ」(Budinath)のチヤイテイヤ支提は、尼波羅國に住んで居る西藏人の特に尊崇して居る堂宇であります。實に驚くべき「シムメトリー」、即ちつりあひの取れて居る建築でありまして、底部

ブドフナートフの支提の略圖



ブドフ、ナートフ」の支提でも、矢張同様の發展を致しまして、土臺は變形して、三層の階級を爲すところの廣い壇となりました。壇(臺座と申しませうか)と、半球と、頂部とは、各々同一の高さを持つて居りまして、約十五「メートル」ムいます。又、底部の三層の壇でありますが、其の形は、圓形でもなく、方形でもありません。外角は皆直角になつて居りますが、四方の各面の中央部が張

と、半球と頂部とが甘く平均して出来て居ります。「スワヤムブフ」の支提は、前にも述べました通り、建築様式の發展の結果、舊建築法の頂部が變形して、本來附屬物に過ぎなかつた部分が、缺くべからざる要素のやうになりました。此の「ブ

り出て、其處に大きな階段が付いて居ります。第一壇の北面には、二つの小さい^{ストウパ}窠堵波が^ムいまして、化粧漆灰が施こしてあります。其の支提の下部のところにある長方形の壁面に、棚様の凹みが作つてありまして、それに横軸を設けて、祈禱輪が嵌めて^ムいます。又半球形のものゝ下部にも、矢張棚様の凹みが、規則正しく^くりど帯のやうにこしらへてありまして、其の中には、阿彌陀佛の像が無數に並べられて居ります。又、上の冠になる部分は、三部から成つて居りまして、それは立方體になつて居る臺と(其の各面には兩眼が描いて^ムいます)、其の上の四面の「ピラミッド」と(それは十三層に切られて居りまして、鍍金した銅板を張つて^ムいます)、一番頂上の「サブヤムプフ」にあるやうな傘飾り(附屬物のある)とであります。

尼波羅國には、尙ほ他の種類の寺院的建物が^ムいます。それは、今日印度には無くなつて居りますが、全極東に廣まつて居りますのみならず、西洋にも最早珍らしくなくなつて居るもので^ムいます。即ち「バゴード」(英語では「バゴダ」といふ)で^ムいます。

譯者申す。此の「バゴード」も塔と譯さねばなりません。けれども、此の塔は、前に述べました支提とは違ひまして、八坂の塔とか、東寺の塔とか、或は三重の塔、五重の塔、なごゝ申します種類の、日本にありふれた形のものによく似て居る塔をいふので^ムいます。

其の「バユード」即ち塔の主要な特質を申しますと、屋根が層々相重なつて（長方形で）、そして通例上に行くほど段々小形になつて居ることゝいふことができます。其の塔が、地面から直ぐに立つて居るといふことは殆んどいふまでもなく、一般に四角形の臺地の上に置かれて居ります。それから、其處へ上つて行くには四つの階段を上らねばならず、其の各階段は、皆一對の「ドラゴン」（龍）で守られて居ります。一番下の、一番大きい室が本堂で、其處には神佛の像が安置してゐます。信者に拜ませる爲め、出してある場合もありますが、又世俗の眼に觸れさうないやうに隠してある場合もあります。其處へ入る戸の上には、大低の場合楕形の付いたはめ板（鏡板）がありまして、欄間のやうなもの、其の中に神佛の屬性（假令へば威力とか、慈悲とかを表はすもの）を彫りつけてあります。其の鏡板は木のこともあれば、金屬のこともあります。何れの場合に於ても、其の彫刻の巧妙なことによつて、尼波羅國の彫刻家又は金銀細工人の、想像や、趣味や、獨創力の豊かなことを證明して居ります。又其の鏡板は、巧みに透し彫にしてありますので、良く光線が室内へ通ると同時に、建物全體の重量を減ずることが出来ます。又、屋根はと申しますと、傾斜が急で、反對傾斜を持つて居る一體の桁構で支へられて居ります。そして其の桁構は、畫家や彫刻家が競つて裝飾を施こします爲めに、實に綺麗でゝいます。下の屋根は、普通赤瓦を以て葺いてありますが、其の上の屋根からは、鍍金した銅板で葺きますので、日光を受けてきら／＼光つて居ります。又、屋根の隅々は支那風に

そり、反つて居りますし、縁を回つて、小幡の下に鈴の付いたものを下げてありますものですから、少しの風にもゆらいで、可愛い音を立てるのであります。又頂には、支提に於けるやうに、日本の



鐘のやうな長手の小鐘樓(梵語では「チューダーマニ」(Cūḍāmanī)と申します。髻珠といふ意味です)がありまして、尖端を、蓮とか、傘とか、日と



か月とかで飾つてあります。

尼波羅國の塔ハチヤの中で、一番立派なのは、何と申しても「チャング、ナ

ラヤン」(Changu Narayan)の塔でありまして、實に彫刻や色彩の妙を極めたものでありますが、最も紀念すべきものと申しますと、一千七百三年(日本では東山天皇の元祿十六年、將軍綱吉公の在世中で、此の年に東大谷本堂遷佛供養會が執行されました。)に「ブフバチンドラ、マッラ」王(Bhup-
atindra Malla)が、「ブントガオン」(Bhagaon)に御建てになりました「ニアトボラ、デヴォール」(Nyapola Deva)即ち五層寺(五重の塔)(Temple aux Cinq Etages)であります。其の寺は、寺自體が五層であります上に、順次に五階を爲して居る臺地の上に建てられて居るのであります。其の階段に添うて、五對の巨大な守護神(若し神といふ字を付するのが不適當ならば守護者といつても宜し、「ガルデヤン」なり)が置いてあります(前掲、塔の略圖参照)。一番下に居るのが、王の力士たる巨大「ジャヤ、マッラ」(Jaya Malla)と、「フハッタ」(Phatta)の像でありまして、十人力を持つて居たと

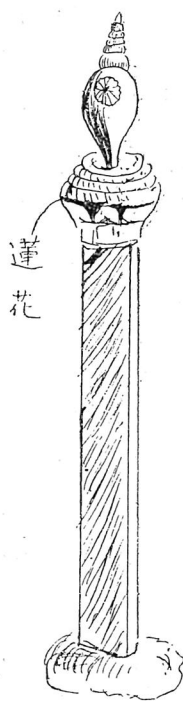
稱へられて居ります。其の上が、二匹の象でありまして、其の十倍の力を持つて居るのであります。其の上が二匹の獅で、これ又象の十倍の力を持つて居るといふ風に、上へ進むに従つて此の十倍の比例で進んで行きまして、獅の上が二匹の虎、それから最後か二基の女神、即ち「シングヒーニー」(Singhini) (牝獅女神)と「ヴィアアグフリーニー」(Vyāghrīnī) (牝虎女神)でありまして、それで終つて居ります。

此等の塔は、支提と古きを争ふなどいふことは元より出来ませぬ。この塔でも、十五世紀(十五世紀と申しますと、日本では應永から明應に互つて、足利義滿の在世中から義政の薨去後數年が含まれることゝなります。雪舟、一休なども此の時代に居りました)以上に溯るとは思はれませぬ。然し、其の建築法はと申しますと、それは疑ひもなく、太古の形式を受け繼いで居るもので、恐らくは印度に於ては、石造建物以前に行はれて、石造建物の手本となつたといふ極めてブリミティブな木造建物の直系であらうと思はれるのであります。日本に於て、聖徳太子の頃、既に法隆寺の金堂や五重塔の建てられたといふことが、第六世紀の終りに於て、已に今日尼波羅國に現存して居るやうな木造の塔の「タイプ」が支那佛教の仲介によつて、朝鮮にまでも廣まつたといふことを證明して居るものであります。そして、朝鮮は、日本美術の先導者でありましたことは申すまでもいませぬ。

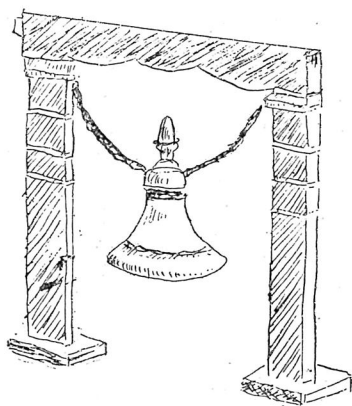
又、十七世紀の中頃(これは丁度、將軍家綱公の初め頃で、黄檗山の建立前後に相當致します)、尼

波羅國に派遣せられたといふ支那使節の嘆美した九重の塔も、恐らく同一「タイプ」のものでありましたでせう。此の點に於ても、尼波羅は、今日消滅した印度の眞の面影を忍ばしめるものでありま

せう。



柱



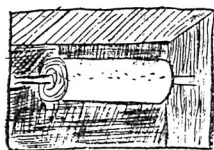
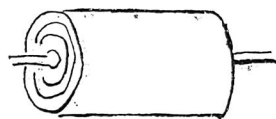
門形柱

それから、建築物の附屬物で、尼波羅に最も弘まつて居るもので、佛教の寺院にもあり、濕婆教の寺院にもあるものは、本堂の前に立てられて居る、獨立した柱であります。それは、圓いこともあり、四角なこともあり、又斜角を持たせてある(菱形なるべし)場合もあります。そして又、直ぐに地面に立つて居る場合、底部に輪の嵌つて居る場合、龜の背に負はせてある場合などありますし、頂上には大抵常に、開

いた蓮花があつて、其の上には、偶像が乗つて居ります。又、其の傍に、屢々別の柱がありましてそれは石で門形に造られて居て、中に大きな鐘が下つて居ります。僧俗を問はず、悪魔を拂ふ目的で其處に參詣に来る人々は、鐘木で其の鐘の側面を打つのであります。鐘は牢しつかり動かないやうに置いて居ります。尼波羅の巧な鑄物師は(尼波羅人は元來金物細工に巧であります)、久しい以前から大形の鐘や、佛事に用ひる小さなのや、塔の屋根に、終日愉快さうに鳴つて居る鈴などを、非常に巧妙に製造致します。それから、寺院にある金屬製の幡も、矢張渠等の手に成るのでムいまして、其等の幡は、よく屋根の尖端から正面の入口まで引渡されてあつたり、又、鐵の竿の尖に付けてあつたり致します。又、以上述べました牢しつかりした附屬物と共に、又其等の無い場合に、長い竹竿を立て、色々の色彩の帛きを附けます。これは、佛蘭西で「オリフラム」と申します小幡のやうなものであります。又、支提の頂上から附近の家まで綱を引張つて、之に澤山の小幡を付けることもあります。かういふことをするのは、特に西藏人に多いのでありまして、渠等は、「ブドフナートフ」や、「ブドフマンダール」(Budhmandal)の寺でやります。

それから又、祈禱輪も西藏佛敎者に限られたことであります。尼波羅國の土人(「グルカ」族に對していふ)はそれを造りますけれど自分で使ひは致しませぬ。此等の金屬圓筒は「スヴァムブフ」と、「ブツドフナートフ」の外にはムいませぬ。其の圓筒には、非常に威力のある文字、即ち「オン、マニ、

祈禱輪



パドメ、フム」(On mani padme hum) (ガラニの) (やうなも) という文字が書いてあります。それから、紙の長い帯を固く巻いたものが、又其の内部に付けてあります。それは、倦むことには、無數に同じ文字が書きつけてあります。それは、倦むことのない物書きの手に成つたものであります。又信者は、其の祈禱輪を廻しながら、お祈りの初めと終りに、口の内で同じ言葉を繰返すのであります。これで、其の昔、佛陀が初めて「ベナレス」(Benares)の野でなさいました様に、信者も亦「法輪を轉ずる」ことを得まするわけであります。いや、つまらぬお洒落を申しまして相濟みません。

「ワジン」(Vajra) 即ち金剛杵は印度教の表章でムいます。然るに佛教は、それを奪つて、自分の表章と致しました。此の有力なる武器を持って、之を打振つて居たものは、「ヴェダ」の神々の中の主位を占めて居る「インドラ」(Indra)、即ち帝釋天であつたのでムいますが、佛陀の爲めに壓服せられて、自分の権力の記章たる此の金剛杵を譲らねばならなくなりました。帝釋天が、もと、惡魔を掃蕩する爲めにそれを用ひて居ましたやうに、其の競争者たる佛僧は、惡魔の群に對して金剛杵を使

ひましたのであります。

金剛杵は、其の最も簡短なものに就て申しますと、しつかり確乎と握るに都合の良い爲め、中央を少し太く致しました棒で、其の兩端には、四本又は八本の鎗式の、曲つた鐵が付いて居りまして、其の尖端が、軸の中心部に向つて又曲つて居るものであります。

金剛杵



尼波羅國にある金剛杵の内で、最も立派な標本はと申しますと、申すまでもなく、「プラーターバー、マッラ」(Pratapa Malla)王が、第十七世紀に(秀吉没後三年に始まり、將軍家康、家光、家綱等を経て、綱吉の時代に及んで居ります。年號にすれば、慶長から元祿に互つて居りまして、注目すべき事件は、江戸城の築造、加茂の祠、黄檗山の建立、島原の平定、隠元、木庵の入寂等であります)、「スヴァムプフ、ナートハ」(神)の臺地に供へつけました。長さ五尺の、鍍金を施したものであります。それは、同臺地への長い段を登りつめると、其の段の出口に置いてあります。然し、これは立派なものゝ例で、普通、金剛杵といへば、支提の尖塔から、僧侶の持つ鈴に至るまで、到るところに見出されるのであります。金剛杵と鈴(Ghanta)とは、組織的の一對を爲しますもので、金剛杵の方は男性で佛陀を表し、鈴は女性で、「プラジナー」(Prāñā)(般若)即ち智恵を表はしますのであります。

尼波羅人は又盛んに佛陀の足跡を表はします。石に彫つたり、色で描いたり致します。そして、それには、「シユリーヴトサ」(Śrīvatsa) 即ち幸福の幢、「パドマ」(Pādma) 即ち平面蓮花、「ドフワツヤ」(Dhvaṇya) 即ち幢、「カラシヤ」(Kalaśa) 即ち寶瓶(サミツ)、「チェハットラ」(Chakra) 即ち傘蓋、「チャーマラ」(Cāmara) 即ち拂子、「マツチャ」(Matsya) 即ち魚、「シヤンクハ」(Śaṅkha) 即ち螺なづ、入つの吉祥の相が描いてありますので、これらのものが描いてあると、佛足のあることがわかるのであります。尙ほ幾つもの同心圓を重ねたものは、「チャクラ」(Cakra)、即ち輪寶を表はしますが、これは、世界的最上權の記號として用ひられます。

以上述べました記號(符號を申しても宜し)は、印度に於て尊崇せられて居る韋紐奴天ヴァイシュヌの足跡にもあります。特に巡拜者が、「伽耶」(Gaya)に於て參拜措かざる不可思議なる足跡に在るのであります。佛陀と韋紐奴天の深い關係は、如來の正覺を御取りなさいました「ボドヒ」(Bodhi)に於て、佛陀の像が、其の儘韋紐奴天の像として拜まれるやうになつたのでもわかりませう。

尼波羅人は、佛陀の足跡以外、尙ほ文殊菩薩(Mañjuśrī)の足跡をも崇拜して居ります。其の足跡には、足を横切つて、一つの目を付けてゐます。それは、支提の尖塔の臺に描かれて居るものと同じやうでゐます。最も尊敬されて居る足跡は、「シヤムブフーナートフ」の西の「プラット、フォーム」(臺地)にゐます。其處は、少しの凹みによつて主なる臺地と分たれて居ります。

「ドハートウ、マングラ」(Dhātu-mandalas) 即ち界曼拏羅は、全然佛教に屬して居るものであります。それは、内を中空にしてある石又は煉瓦製の圓筒でありまして、其の中空の處は、窄塔波の遺物を納めてある處に相當するのであります。其の相違する點は、此の曼拏羅にあつては、神靈の御宿りになる爲めに、其處を空虚の儘にして置くといふところに亙ります。其の圓筒は圓い石で蓋を致します。そして、其の石には、曼拏羅と申して、巧に入組ませた作圖を描きまして之を飾るのであります。其の圖は、各種の寓意畫や、圖畫を、一定の順序で組合せてあるのであります。若し此の界曼拏羅が、文殊菩薩の爲めに製られたものでありますと、それには、二百二十二の繪を描きまして「ドハールマ、ドハートウ、マングラ」(Dharma-dhātu-māṇḍala)、即ち法界曼拏羅と申します。若し又「ヴェイロチャーナー」(Vairocana)、即ち大日如來の爲めに製りましたものでありますと(此の大日如來は、佛陀の中の最も崇嚴なものとせられて居ります)、それを飾る畫は唯五十乃至六十でありまして、其の時には、それを「ブジュラ、ドハートウ、マングラ」(Vajra-dhātu-māṇḍala)、即ち金剛界曼拏羅と申します。

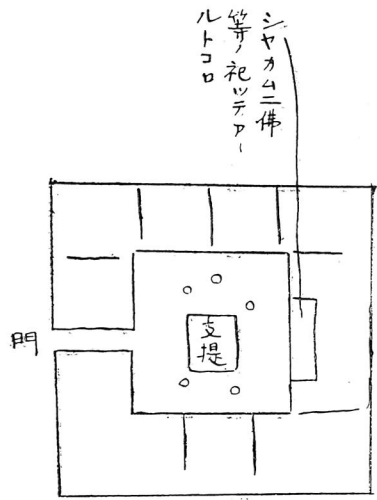
以上、神の宿所として殿堂のことを申し上げましたから、今度は、宗教家團に向けられた造營物

に就て申上げませう。

尼波羅國の佛敎は、昔の「ヴィハラー」(Vihāra)、即ち寺院或は精舎を受け継ぎました。此の寺院即ち「ヴィハラー」と申しますのは、古代の僧達が、雨期を過す爲めや、勉強する爲め、又黙想する爲めに引籠つた共同家屋で亙ります。「パタン」(Patan)の都には(これは、古い、信仰の都で亙りますが)、十五の大寺院を、之に屬する一百斗りの支院とが亙りますので、それを誇りと致して居ります。「カートマンチヤ」(Kātmāndū)には、八大寺院を、八十八の小寺院とが亙ります。此等の寺院の主要なる様式と申しますと、何處のも同一で亙ります。即ち、(此の「ヴィハラー」は、俗には「ビハル」(Bihar)とも、「ビハル」(Bahār)とも、「ビヒ」(Bihī)とも申します)、四角な二階屋が幾つかあつて、それが、中央に支提の建てある内庭の周圍に建造されて居ります。そして、其の支提を取巻いて、一層小さい「モニュメント」(支提様の)の立てられて居ることが屢々あるので亙ります。

其處へ入りますには、窄く^{せま}て低い門を通つて入るのでありますが、其の門には、二つの目と二つの水瓶とを外部に彫刻して亙ります。又、入口には、右の方に歡喜天 (Gālegā)、左の方に大黒天 (Mahākāla) が立つて居ります。歡喜天の方は、頭が象の頭ですからわかりやすく、大黒天の方は、齒が前に飛び出して、赤い目が三つ付いて、其の髑髏^{しやくぶ}の華鬘^{けわん}が付けてありますから、直ぐわかりやすく。

寺院の理想像



入口に面して、反對の房舎の中には、釋迦牟尼佛(Cakyanami)を祭つてある「ホコラ」がありまして、其の中に、釋迦佛の立像が、諸天、諸神祇、及び菩薩(Bodhisattvas)の無數に取り巻かれて居ります。此等の、諸天、諸神祇、及び菩薩の像は、或は彫刻したのもあり、又描いたのもあります。

周圍の房舎の残る三面は、下(即ち地面並)が歩廊になつて居りまして、其處は、散歩場ともなり、又物置ともなつて居ります。此處へ、祭祀用の雜具とか、定期の祭禮などに用ふる諸道具類が、無造作に列べられて居りまして、大分不體裁でムいいます。然し、圓柱といひ、窓といひ、門の戸といひ、嵌子の板といひ、皆立派に彫刻してあります。まして、尼波羅人の鑿の牙や、木彫の技の巧妙なことを證明して居ります。

今日尼波羅國に存在して居ります寺院の多くは、最も古い時代に出來たものだと主張して居ります。例へば、「チャールマテイ」(Carmati)〔俗語で「チャンヒル」(Chaha-hil)とらひます〕といふ寺院が「デオ、パタン」(Deo Patan)の北にありますが、紀元前三世紀に印度に君臨せられました阿育王の

王女の御建てなさいましたもので、其の名を取つて斯く寺號としたものだご申して居ります。何でも、王女は、御父阿育王が佛蹟巡拜に御出掛けなさいましたとき、同伴せられまして、尼波羅國に御いでなりましたが、此處で一つの不思議な瑞兆を御覽になりました、其の地に御止まりなさいますことゝなりました。不思議と申しますのは、鐵で作つた矢が突然石に變つたと申すことでムいます。そこで、阿育王は、王女を此の國の武士で、「デーヴ、バーラ」(Devā Pāra)と申す方に御配めあはしなさいまして、この若夫婦は、今の「デオ、バタン」といふ處に御住居になり、子孫繁昌致しましたが、遂に「チャールマテイ」王女もお歳を御召しなさいましたので、御自分の御名前を寺號とした一寺を御建立なさいまして、此處に御引退遊ばされ、おなくなりなさいましたと申すことでムいます。

今日、尼波羅國に残つて居ります金石文を讀んで見ますと、西曆紀元後第七世紀(支那ならば、隋の煬帝から、唐の高祖、太宗、高宗を経て中宗に至るまでの間、日本では、推古天皇から、舒明、皇極、孝徳、齊明、天智、天武を経て持統天皇に至るまでの御世を含む)以來、尼波羅國には澤山寺院のあつたことが判明致します。其の數多い寺院の中に、「グム、ギハハラ」(Gum-vihāra)といふのがムいます(これは山の寺といふ意味で、「グム」といふ語は、尼波羅語で山といふことであります)。此の寺の名稱は、此の地方の俗語から採つたものでありますが、寺號は、通例梵語で付けることになつて居るのでムいます。(「グム、ギハハラ」は、別に梵語で、「マニ、チューダ、ギハハラ」ども申

します)

又、同様に、「フラム、ギハラー」(Hlam-vihāra)といふ寺がムいます。これも「グム、ギハラー」と同じく舊い時代に出来たものでありますが、西暦第十一世紀時代(紫式部の卒後十年をも経ない一條天皇の長保年中から、三條、後一條、後朱雀、後冷泉、後三條の諸帝を経て、堀川天皇の康和初年までの期間を含む。安倍晴明、行成卿、安部頼時、源頼義など此の間に死去し、源義家、大江匡房などは未だ存命でありました)に書いた寫本に據りますと、此の寺は『尼波羅國に相當ふまはしき裝飾かざりたらしめむが爲め、古王朝の建立したるものにして、如來の御言葉此處に永劫の光を放つ』とムいますから、十一世紀時代に於て、已に、此の「フラム、ギハラー」は餘程舊い時代に出来たもの、と思はれて居たことが判明致します」。

西暦第七世紀の末(日本ならば、持統天皇、文武天皇の御宇で、支那ならば、唐の中宗皇帝又は則天武后の時代であります)であります。印度に留學して支那に歸つた義淨三藏(Tsing)が、大唐西域求法高僧傳の中で、天王寺(T'ieh-wang-sen)といふ尼波羅國の寺院のことを述べて居ります。即ち、支那から、西藏の王索倫贊堪布王(Srong-tsan-gam-po)に降嫁した文成公主の乳母の子が、當時此の天王寺に居つたといふことを述べてムいます。義淨三藏の附加へて言ふところによりますと、此の佛教の苾芻びどくは、梵語と梵書とを善くするとあります。(參照Ⅱ復在二人、在泥波羅國、是土蕃

公主妳母之息也、初並出家、後一歸俗、住天王寺、善梵語并梵書、年三十五矣。これを以て見ますと、梵語の敎育は、當時尼波羅國の寺院に於ても盛でありまして、西藏人でも、佛敎僧侶の本分を思ふものは、尼波羅に赴いて、之を修めたといふことが判明致します。

右に述べましたやうに、寺院は昔ながらの寺院であります。寺院に住む人々は昔と變りまして歎かばしい有様となりました。若し寺院といふものが、昔時は禪定三昧と、祈禱とを爲さむとする者が立て籠る處であつたとしても、今日では——今日では、老若男女が打混じて、わい／＼騒いで居る、やかましい群集の宿泊所となつて了ひました。而かも、窄くて、低くて、衛生などには一切頓着せず、金銀細工とか、彫刻とか、裝飾の仕事とか、全く俗世界の事斗りをやつて居る所たるに過ぎませぬ。又、自稱比丘 (Bhiksus) も居るには居りますが、外に出ると、矢張大工の仕事をしたり、鑄物師となつたり、左官をやつたりして居ります有様で、佛敎の學問は將に亡びんとして居ります。否、已に亡びて居ると申した方が適當でみすはまいます。

「ブージャーリ」(Pujari)と申しまして、見窄らしいみすは伴僧が、僧團から朝夕の勤行を引受けて、御釋迦様の像の前で、毎日、格外れの梵語の讚詩 (Sotoras) をうに、や／＼唱へて居りますが、唱へながらも、其の意味は一切判つて居るのではありませぬ。又、八千頌般若波羅蜜多經 (Prajñāpāramitā)

(八千頌) (Aṣṭa-sāhasikā) の一章を誦讀致しますが、これは猶更、わかつて居るのでは無いませぬ。此の、見窄らしい無學な伴僧が、昔し、信念の堅い、道心の満ちくた寫經者が寫して残して行つた古寫經を持つて居りまして、其の貴重な遺物を、「時」と虫とに委ね去つて、舊びれば舊びる儘、虫が喰へば喰ふ儘にして、平氣で濟しこんで居るのであります。かくして、佛教舊時の學問の傳統は正に滅びつゝあるのであります。第十九世紀の始め頃(享和から天保以前頃)英國人で尼波羅國に駐在官となつて居りました「ホヂソン」(Hodgson)といふ人は、其の駐在中、教へを請ふに足るだけの眞の佛教學者を見付け得たさうですけど、それから、私が、一千八百九十八年(今より二十五年前)に初めて尼波羅國に赴きました當時でも、まだ佛教學者が若干ありまして、梵語で話も出来れば、佛典を若干讀んでも居りましたけれど、昨年(一千九百二十二年)再び此の國に入りました時は佛教の學者と申しては、最早一人も見出すことは出来ませんでした。「バンデイタ」即ち學者と呼ばれて居ります者でも、古寫經を精確に寫し直すことすら出来ません。渠等は、古寫經を藏して居りますことは居りますが、それは、研究の爲でもなく、讀むためですらもなく、唯、他人に見せじの嫉妬心から之を所藏して居るに過ぎないのでムいいます。

過去の精神は亡びましたが、形式の幾分は残りました。此の國の佛教の僧侶に、「バンラ」(Banra)

と申す階級のものがありますが、これは、結婚もし、子も生んで、一家の家長ともなり、職人ともなつて居ります。然らば、此の「バンラ」といふものは、出家となる手續を経たものでないかと申しますと、矢張り經たものであります。矢張り、正式の戒律に規定せられて居る戒を受けて出家したものであります。然るに、茲に一つの便法がありまして、一方では、佛教の古來の傳説に對する尊重心と、他方では、現代社會の産み出す要求とを、巧に調和さす解決法があるのであります。それは、如何なる解決法かと申しますと、先づ茲に一人の僧侶志望者があると致しますと、其の者は、自分の師傳、即ち「グル」(Guru)と梵語で申します人に就いて、自分が僧バンラとなつて、僧團の中に入りたいといふ志望を述べます。すると、「グル」即ち師傳は、禁厭まぢなひに使ひます表と、加持して神聖に致しました道具とを持ち出して參りまして、先づ、三種の保護を僧侶志望者に與へることゝ致します。三種の保護と申しますのは、第一は「ヴジュラ」の保護 (Vajirakṣā) で、これは金剛杵即ち「ヴジュラ」を用ひて致します。第二は鐵の保護 (Loharaksā) で、これは、鈴を振るうて致します。第三は火の保護 (Agniraksā) と申しまして、火酒を杯に盛つて致します。それから、加持して神水 (Kālagadhiskā) を、僧侶志望者の頭に灌ぎまして、所謂灌頂の式を擧げます。かくして後、二日經てから、師傳たる人は、其の寺院の「ナーヤカ」(Nayaka) 即ち上首と、近傍の寺院の上首四人と、都合五人の立會の上、出家さす式を舉行致します。これは、僧團に入る契約を致す式でありまして、之に

よつて、僧侶志望者は、確定的に俗世界から離れて了ふのでムいます。新發意は、先づ第一に五戒を受けます(五戒=Varmanā)。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の戒が即ちこれでありませう。又、十學處(Ṭikāśāpāda)の戒を受けます。即ち、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、舞踏、身に璣珞を纏ふこと、高き床に臥すこと、非時の食事を爲すこと、金銀に手を觸るゝこと、を戒めるのであります。斯くして、新發意は、出家に要する一切の調度を貰ひます。即ち、「チーヅラ」(Cīvara)といふ身の上部に纏ふころも(支那では衣を譯して居ります)と、「ニヅーサ」と申して、身の下部に着けるころも(支那では裙と譯して居ります)、それから、第三に鉢(Piṇḍa-pātra)、第四に錫杖、(Kṣhikāra)、第五に木履、第六に深そうかん罐、第七に傘、であります。これで、正式に出家の式は済みますが、「タントラ」(怛特羅)宗の教理が之に加はつて、種々の附帶の式典を添へて居ります。これは、「ブハイラヴ」(Bhairava)とか、大黒(Mahākāla)とか、「ヴスンドハーラー」(Vasundharā)とかいふやうな、本來佛敎に關係のない神様を祭る式典でムいます。

それから四日間、新に出家した新發意は、神妙に振舞つて居りますが、さて、四日経ちますと自分の「グル」、即ち師傅と仰いで居る人の許にやつて参りまして、申します。

「御師匠さま、私は、とても出家となつて居ることは出来ませぬ。どうか、この着物や、其の他、僧侶の身分を標示するしるしを御取り去り下さいませ。小乗的な聲聞(Śrāvaka)の修行は止めまし

て戴いて、どうか、大乘的の修行を教へて下さいませ」と。

斯く申しますと、「グル」、即ち師傳となつて居る人は答へます。

「成程なり。此の末法の世には、出家のつとめ(Pravrajya)を修行することは六ヶ敷い。それでは大乘のつとめを修行するがよい。然し、お前が、出家の生活をやめるにしても、五戒を解くわけには行かぬ。殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、此の五つを爲てはならぬぞ」と、

手品はこれで終つたのでムいます。昨日まで御出家であつたものが、今日は、妻も子もある家庭の人となります。

「バンラ」といふ言葉は、梵語の「バンディヤ」(Bandyā)から訛つた言葉で、「バンディヤ」といふ語は、禮札せらるべきものといふ語であります。支那では、眸睇と音譯あります。

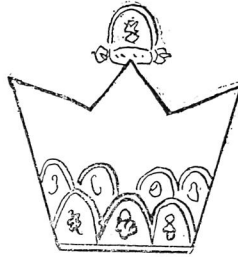
この「バンディヤ」即ち「バンラ」は、これも、これも、無差別に神佛に奉仕する資格があるかと申しますに、さうではありませぬ。神佛に奉仕する祭司の職分は、僧團の中でも、唯二つの階級にのみ限られて居ります。第一が「グブハルシュ」(Gubhūs)といふ階級で、第二は「ブヒクシユ」(Bhikṣu) (即ち比丘といふ階級でありまして、而かも此の二階級の間にも、権限が平等でありませぬ。「グブハルシュ」のみは、金剛阿遮利耶(Vajracārya)の位に上る資格があります。これは門地が善いからでありまして、この資格を失ふまいとするには、妻帯する前に一種の試験を受けて、祭祀を司ぐる

能力あることを證明せねばなりません。護摩(Homā)を焼く式は毎日舉行せられるのでありますが、此の式では、酥油と穀物とを神への供物として火中に投じますと、焰が此の供物を神の許に持つて行くといふことになつて居りますので、「グブハルジュ」のものは、此の護摩を焼く式典に於て、導師の役を勤めることが出来なければなりません。若し、然るべき時期に此の免許を得ることを怠つた場合には、貶せられて、比丘の階級に落ちなければなりません。一旦比丘の階級に落ちますと、後に生るべき子々孫々までも、其の境界に引入れて了ふこととなる譯でゐます。之に反して、若し、其の人が、護摩の式典に於てのみならず、其の以上のことにまでも通曉して居るとなると、今度は、たいの「グブハルジュ」でなく、金剛阿遮利耶の稱號を得るのであります。今一層偉さうに申しますと、此の稱號は、「金剛阿遮利耶—阿羅漢—比丘—佛」(Vajrācārya-arhat-Bhikṣu-buddha)と申すのであります。これで、一切の尊さを享有することになりまして、公私一切の宗教上の祭祀を営みます際に、自分のみ獨り導師となることが出来ますのでゐます。又結婚、葬式、誕生のときにも、宗教上の式典を正式に營む資格があるのでゐます。

神に奉仕する制服としては、頭に鍍金した銅の寶冠を戴きます。其の寶冠には、盛んに彫刻を施こし、諸佛と其の配偶者たる「ターラー」(Tārās) 佛との像を入れた二列の楕形の紋をつけて居り、其の上に金剛杵を横たへ、其の又上に楕形を付けて居ります。手には、金剛杵と鈴とを持ち、頸から

帶の所まで、百八顆の珠數が垂れて居りまして、其の珠數の中に、處々、金剛杵と鈴とを綴ぢ込んであります。又、袈裟(Kasaya)を着けて居りま

寶冠の理想の圖像



すが、色はくすんだ赭色(アカ)であります。此の袈裟は、「チーワラ」(Chivara)と「ニヴァーサ」(Nivasa)から出来て居りまして、「チーワラ」即ち衣の方は、びつたり(からた)、身體にくつついて居りますし、「ニヴァーサ」即ち褶(ひた)の方は、褶を爲して帶のところにたなはつて居ります。

比丘の階級の者は、金剛阿遮利耶の助手でありまして、大體同じ服装として居りますが、標幟は異つて居ります。即ち、頭には帛(き)で製つた色頭巾を戴いて居りますが、其の頭巾の頂には、鍍金した卸(ボクシ)様のものか、又は金剛杵が付いて居ります。頸から垂れて居る珠數には何等の裝飾もありません。手には、錫杖と鉢とを携へて居ります。

古王朝の下では、寺院は、莫大な財産を所持して居りました。王侯と私人と、競つて寺院に布施や寄附を致しました。極めて古い時代の碑銘を讀んで見ますと、其の多くは、寺院に喜捨したことを後世に傳へんために建てられたもので、西曆紀元第六世紀（日本では、武烈天皇の御代に始まつて、繼體、安閑、宣化、欽明、敏達、用明、崇峻、の諸帝を經、推古天皇の初世に至る時期を含み

蘇我稻目、蘇我馬子、聖德太子などが居りましたから始まつて、尼波羅國の年代記は、殆んど、一々の國王の治下に、新寺院の建立のあつたことを記載して居ります。

然るに、婆羅門教の宣傳と、印度教徒の王朝が尼波羅國を征服したことゝは、寺院の繁榮に回復の出來ない打撃を加へたものであります。争鬭は、全く覆面的に、隱約の中に行はれました。西曆紀元、約一千六百二十年から一千六百五十七年に亙る「シッドドヒ、ナラシンハ」(Siddhi Narasimha) 王の時代が(これは、日本では、元和六年、即ち家康薨去後五年から、明曆三年東都の大火の年で、黄檗山建立の四年後までとなります)危険の最も甚しい契機の一を示すものであります。此の王は、波羅門族より起つたと自稱する王家に屬して居りまして、「クリシユナ」(Krisna) (韋紐奴天の權化)といふ神様に、熱心な願を籠めました。此の神様は、元來肉欲的でやさしい性質の神様でありますから、其の靈感によつたものかも知れませんが、王様は、斷えず苦行を致されまして、月の盈虚消長によつて食事を増減する「チャンドラーヤナ」(Candriyana) といふ苦しい行をしながら、晝は祈禱で過し、夜は、石の床に眠り、果は、^{ハテ}「ファキール」と呼ばるゝ回々教の行者に變裝して、身を隠して御了ひなすつたと申すことでムいますが、當時、其の都であつた「バタン」は、十五の大寺院の存在するところでありまして、從て佛教の金城鐵壁とも見られ、王權に對して、抵抗の根據地となる用意は常に出來て居りました。「シッドドヒ、ナラシンハ」王は、此の宗教團體を、俗權の

下に服従せしめむと企てましたが、それには、何等暴力も、武器も用ひませんで、唯法律上の手段のみを選びました。一體、此等の寺院は、外觀上、無統治、無秩序の状態にあつたものでありますが、これが却つて、王權から離れて獨立して居るには好都合であつたのであります。そこで、王は先づ、この無統治、無秩序の外觀を破壊することに着手致しまして、各團體から、それら^をを代表する正式の代表者を選出せしめ、王權の前に連帶責任を持たせることゝ致しました。

「バタン」や「キールティプル」(Kiritpur)や「チヨバン」(Chahan)の寺院は、階級的の順位を附せられました。そして、それを定めるのに、或は建立の新舊を標準としたり、或は偶然の事情を標準としたり致しました。これは、王の無關心を證明するかのやうに見えたのであります。此等の寺院の中、最も重要なものは、各其の上首、即ち「ナーヤカ」(Nyaka)を代表者と致しました。公^{おほやけ}には之を如來即ち「タトハーガタ」(Tathagata)と呼びました。第二流の寺院となりますと、全部を引くるめて唯一人の代表しか出すこと出來ず、而かも、其の代表者は、此等寺院の上首中、最年長者を以て之に宛てたのであります。選舉に關する細かいことは、敕令で定められました。

このやうに、寺院の上首は、國家の行政機關の一部を分擔することゝなりました爲め、最早や、宗敎上の任務を盡すことが出來ず、此の任務は、他の僧の手に移つて行きました。

又、王の時までは、各寺院の長老十人は、十波羅蜜 (Paramitas) の權化として、祭禮の日に、檀

越の人々から禮拜を受け、人々は、其の足を洗つたり、牛乳で米を煮た乳糜といふものを供養したりしたものであります。然るに、「シッドドヒ、ナラシンハ」王は人民の財源を涵養する目的で此の十人の受益者の數を二人に減じまして、マツチェンドラ、ナートン」(Matsyendra Natha)の祭禮の行列に、神輿の通る道の兩端に在る寺院の年長者二人だけが、此の供養恭敬を受け得ることゝ致しました。

それから又、僧侶は、妻帯して、一家の主人となつた以上、印度教に規定するところの、サカ祓、サカ禊の式典の規則に服従せねばならぬやうになりました。例へば、家族の中に死亡者が出來ますと、護摩の祭祀を舉行せねばなりません。若し之を舉行しないと、法律に定めてある觸穢の規定に觸れますから、罰せられなくてはなりません。又、尼波羅の土人で、佛教徒であつた者が、西藏に旅行したとか、居住したとかした者は、歸國の際、身の不淨を洗ふ禊の祭典を舉行する義務を負はせられました。これをするには、寺院の上首五名のものに頼んでして貰ふのですが、此の時に支拂ふ報酬は、王の收入に歸するわけであります。

然し又、寺院の中には、妻帯をしないで、どこまでも獨身生活を續けて居つた寺院もありまして此等の寺院は、王の定めました規定の束縛から逸出しやうと試みました。それで、敕令聽取の爲めの召集を受けましたとき、二十五箇寺に對する十箇寺だけは、代表者を出しませんでした。そこで

「シッドドヒ、ナラシンハ」王は、官選を以て管理人を指定致しまして、選舉による代表者たるべき者に代らしめ、此等王命に反抗する寺院を特別の法規で取締ることゝ致しました。

「シッドドヒ、ナラシンハ」王の後一百年を経て起りました「グルクハ」(Gurkha)族の尼波羅國征服といふ事實は、大團圓の時機を早めました。敵對行爲と思はれるほど、事々に表はす爲政者の惡意、寺院財産の沒收、極めて僅少なる補助金に對してすら爲さるゝ執念深い下附拒絶、なごゝいふ事柄が、さしも富み榮えて居た佛教寺院を、老羸無力の悲惨な状態に陥れて了つたのであります。

*

*

*

*

今や尼波羅國の佛教は、瀕死の状態にあります。今に於て之を救ふ方法を考へることは、正しく佛教々團の責務を一身に荷ふ方々の義務でありませう。之に關して、尼波羅國王の好意を御持ちになつて居られますことは確實であります。王は、わがりのよい、寛仁な方でありまして、個人としては、婆羅門教に深く歸依しておいでゝいますけれど、佛教に對する趣味も御持ちなさいますので、私の研究に就きましても、いつも變らずに御幫助下さいます次第であります。私が、今度、古代佛教の重要な著述、就中、俱舍論(Abhidharmakosa)の偈辭(Karika)の一部、梵語で書いた阿含經(Agama)の斷片の若干を發見することの出來ましたのも、全く國王の御援助の御蔭であります。

た。又、王は私に、迦毘羅城(Kapilavastu)の大仕掛の發掘を指揮して貰ひたいと仰せられました。此の迦毘羅城と申すは、佛誕生の都で、今は廢墟となつて居る處でゐます。王は又、發掘物を有効ならしめる爲めに要する一切の費用は、何時でも支出すると仰せられました。然し、王の周圍に居る「グルクハ」族出身の貴族達は、佛敎に對して敵意を懷いて居りますから、反動の危険を避けるが爲めには、用心して行動せなくてはなりません。然し、いかに其の仕事が六ヶ敷いことであるにしても、一旦之を爲し遂げた曉には、これ實に、印度の中で、最後まで生殘つた古代印度の佛敎のあかしを立てるものを救ひ得たこととなるのでゐますから、其の功績は猶更偉大なわけでゐませう。(完)

本講演を譯しますに就ては、通譯者は神博士の非常な御援助を辱う致しました。否、全篇博士の手に成つたと申しても良い位でゐます。茲に謹んで博士の御好意を謝し、合せて、此の事實を讀者諸君に告白致して置きます。通譯者識

